

八王子市郷土資料館 だより

vol. 95

2014. 7

HACHIOUJI CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS



目次

- P. 1 古い写真を読む②⑦
検出された“方形周溝墓”
- P. 2 2014. 郷土資料館案内
- P. 3 戦時中の模型飛行機作り
- P. 4 千人同心日光往還探訪記
- P. 6 市制施行 20 周年記念広告祭
—大谷仁助商店—
- P. 7 八王子の秤座出張所御用留
～幕末の八王子を読み解く～
- P. 8 廣園寺の梵鐘銘について

古い写真を読む②⑦ 検出された“方形周溝墓” (昭和 39 年 / 梶國男氏所蔵)

昭和 39 年 (1964)、中央自動車道の建設に先立ち、宇津木町から尾崎町にかけて広がる宇津木向原遺跡の発掘調査がおこなわれた。当時、発掘作業は大学生や高校生が中心となり、行政による発掘調査体制は、まだ整備されていなかった。

この調査でみつかった溝と墓穴は、併せて「方形周溝墓」と命名された。今からちょうど 50 年前のことであった。

昭和 42 年、宇津木向原遺跡の出土品を含む市内の文化財の保存・公開を目的とした施設、郷土資料館が建設された。

なお、平成 26 年 3 月、宇津木向原遺跡の方形周溝墓出土品は、東京都の文化財に指定されている。

(こん)

2014. 郷土資料館案内

郷土資料館の上半期の展示、イベント等をご紹介します。

★★コーナー展 館内の一部の展示ケースを使ったミニ・テーマ展示です。☆☆
戦時下の生活 ～ぜいたくは敵だ～ 7月12日(土)～8月31日(日)

資料館では毎年、戦争の悲惨さと平和の大切さについて考えてもらおうと、夏休みに戦争関連の展示を行っています。本年は戦争中に余儀なくされた耐乏生活をテーマに展示します。

土偶

7月29日(火)～9月28日(日)

資料館建設のきっかけとなった井上コレクションから土偶を取り上げ、八王子の遺跡から出土した土偶とあわせて紹介します。



平成 26 年度特別展

幕末の八王子～西洋との接触～

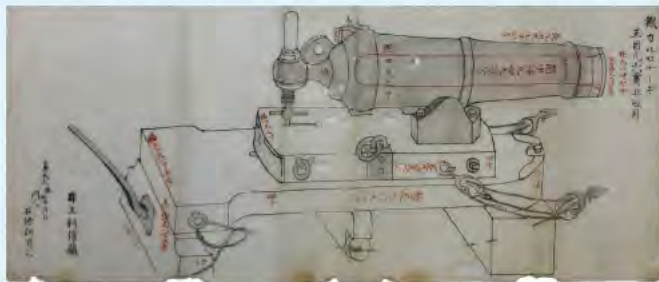
10月1日(水)～11月24日(月)

1階特別展示室・エントランスギャラリー

江戸時代後期、19世紀になると日本沿岸に外国船がしばしば到来するようになりました。特に嘉永6年(1853)の黒船来航は日本人に大きな衝撃を与えます。人びとは外国船の来航に軍事的な不安を感じつつも、西洋の情報や新しい技術に関心を寄せるようになりました。八王子でも、盛んに情報の収集が行われますが、そこで大きな役割を果たしたのが八王子千人同心でした。

黒船来航以前に先進的な海防策を唱えた松本斗機蔵や、蘭学を修めて西洋医学の発展に貢献した秋山義方・佐蔵親子、黒船以後に高度な西洋軍制研究を行った千人頭河野仲次郎。そして幕府の命令で海岸防衛などのために日本各地へ派遣された千人同心たち。彼らの活動によって、八王子にも西洋の知識や国内外の風聞がもたらされます。

今回の特別展では、千人同心の活動を中心におき、幕末の八王子と西洋の接触を紹介します。



左：河野家文書「カルロナーデ砲実測図」(嘉永6年10月)

図中には「鐵カルロナーデ」とある。日本の大砲は青銅製が主流で、鉄製の砲筒は西洋からもたらされた最新鋭のものだった。この図面には、砲筒内寸等の寸法が細かく記載されている。幕末にはこうした西洋砲術の資料が作られ、砲術を学ぶ人達によって書写された。千人同心も丁寧に書き写しており、原寸大の図面も残っている。

ワークショップ

参加・体験型の催しです。歴史の勉強をしながら、工作などを楽します。

まゆ玉人形を作ろう 各回とも先着20名。当日受付

7月23日(水) 午前の部：10時～、午後の部：13時30分～

火おこし体験と土器づくり～原始・古代の生活体験～

8月6日(水) ※事前申込みが必要です。

お手玉づくり 体験コーナーの機織り機で織った布を使って、お手玉を作って遊みましょう。

11月24日(月・祝日) ※事前申込みが必要です。



まゆ玉人形

5月5日に郷土資料館で昔遊びのワークショップ「紙飛行機を作って飛ばそう」を開催しました(写真1)。この講座で使用した飛行機の型紙は、昭和16年(1941)の文部省発行の国民学校(現在の小学校)2年生用の工作の教科書に掲載されている「ヒカウキ」の項目の図面と完成した飛行機のページ(写真2)を参考にしました。教科書には使用する材料や手順は記されていないので、試行錯誤の

末、中厚紙を切り抜き糊で接着し機長10cmの紙飛行機を製作し、飛行させることができました。



写真1 講座の様子

国内では明治40年代に飛行機の飛行実験が始まり、41年(1908)には国産の模型飛行機が販売され、模型飛行機を作るための科学雑誌や工作書が出版されていきます。

第二次世界大戦以前からドイツでは自国の航空技術を維持するために、模型飛行機教育が行われました。ドイツと同盟関係にあった日本でも模型飛行機教育が実施され、文部省が昭和16~20年に国民学校初等科1年生~高等科2年生までの8年間に芸能科の工作の授業に導入します。初等科第1・2学年は中厚紙とキビガラ(キビの茎に彩色したもの)を使用した紙飛行機の製作で、3年生からは本格的な模型飛行機作り(写真3参照)の授業が始まります。翼はろうそくで竹ひごをあぶり折り曲げて紙を貼り、ゴムひもを動力としてプロペラを回すもので、学年が上がるにつれ

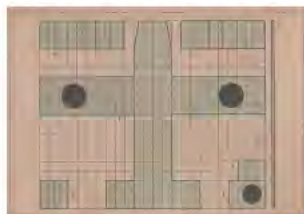


写真2『エノホン 二』「ヒカウキ」昭和16年 文部省



写真3『初等科工作 三 男子用』「飛行機」昭和18年 文部省



写真4「第二回全日本模型飛行機競技府大会」昭和17年5月 真野ウタ氏所蔵

飛行機が飛ぶための理論なども勉強しました。また昭和13年(1938)の国家総動員法により国民の生活は統制され、玩具を製造するためのゴムや鉛などの素材が製造販売禁止になり、模型飛行機玩具業界は、木製の模型飛行機を教材として販売することに活路を見出そうとします。模型飛行機の学校工作運動を推進し、新聞社などと共催し模型飛行機を飛ばす競技会を開催したことから模型飛行機ブームが起きました。八王子では昭和16年9月に第一回、翌17年5月10日に第二回全日本模型飛行機競技府大会が大日本飛行協会並びに東京日日新聞社主催により八王子鍛錬馬場(高倉町にあった八王子競馬場)で開催されました。写真4は軍隊に行った先生と子供たちが一緒に写った第二回大会の様子です。5月24日には八王子第九国民学校(現・第九小学校/中野上町)で、科学教育の振興を図るために航空訓練部が新設され、浅川の河原で模型飛翔大会を開催しています。このような新聞記事から、当時国をあげて模型飛行機を利用した科学軍事教育が行われ、同時に航空技術が急伸した時代でもあったことがわかります。

しかし、昭和20年(1945)に太平洋戦争が終わると、こうした教科書のうち、戦前の軍事教育を目的として作られた部分は、切り取られたり墨で塗りつぶされることになり、模型飛行機のページも同様に削除されました。戦後、一時期途絶えていた模型飛行機作りは昭和20年後半から復活し、昭和30年代にスポーツや趣味的なものとして新たな模型飛行機ブームが起こるのです。

〔主な参考文献〕『明治ニュース事典 第八巻』昭和61年発行、東京日日新聞府下版(昭和17年)ほか

千人同心といえば八王子。その任務とはといえば日光勤番。八王子から日光までの約156kmの道のりを3泊4日で行き来をしていました。その道筋を実際に歩いて体験することを目的に、私たち郷土資料館ガイドボランティア有志が平成23年10月9日に千人同心組頭塩野適齋てきさいの墓のある極楽寺から歩き始めました。以来、気候の厳しい月を避けて、千人同心が日光往還で通った道を近傍の神社仏閣や名所旧跡などを訪ねながら日帰り北上しました。平成26年4月21日に日光の鉢石に到達、そこまでの開催回数は13回に及びました。14回目は日光山内の防火見廻りのコースを歩きました。

千人同心日光往還の追体験の仕方には、いろいろな視点があると思いますが、私たちそれぞれが日光往還歩きで印象に残った見所や感懐を記します。

【八王子から最初の宿泊地 坂戸宿へ】最初の関心事は、「慶安の初めに、千人衆日光へ往復のため…、作目村の地にて玉川を渡りて、拝島村へ日光街道を開かれたり。」(『武蔵名勝図会』)、「百姓渡しにて…、冬より春の間は土橋を架して往来の便をなせるなり」(『新編武蔵国風土記稿』)と記されている拝島の渡しの場所です。拝島橋を渡った上流側100mほどのところに表示板がありますが、正確な場所ではありませんでした。下りの宿泊地の扇町屋(入

間市)はきれいな街並みですが、古い佇まいの家もあり、宿場であった町の雰囲気が残っています。富士・大山講おおやまの参詣者でも賑わったからでしょうか。入間川の根岸の渡しも場所をはっきりしませんが、増水期は舟、湯水期は橋を架けたそうです。高萩(日光市)の先の日光街道杉並木は5km余続き、17世紀末の植栽と推定される約千本が残っていて、当時の街道の面影を伝えています。坂戸神社の先からの1km程が坂戸宿で最初の宿泊地です。現在も坂戸市の中心街で、落ち着いた佇まいを見せています。ここまで約38km、この宿で初日の疲れを癒したことでしょう。(福)

【高坂宿から行田(忍)宿へ】東武東上線高坂駅(東松山市)から少し東に歩くと旧道があり、高坂神社・東光院・高済寺と続きます。同心達は、その先で都幾川を渡ったようですが、現在は少し西寄りの東松山橋で渡り、東松山市街に進みます。新道が多く造られ、寺社を目印に旧道を歩きました。東松山市では、史跡として興味のある所に寄り道をして廻りました。市街西に位置する箭弓稻荷神社やきゅうは商売・開運の神で有名ですが、本拝殿を飾る彫刻も見事でした。そこから東に2km位歩くと松山城跡があり、その北に吉見百穴もあります。その後、県道行田東松山線ぎょうだで北東に進み、昔川幅30間と言われる荒川の渡河おおあしは大芦の渡しでしたが、今は長さ1km以上もある大芦橋で渡ります。吹上では中山道と交差する場所に「間の宿」があったことを記す碑が建っています。更に北東に進み、水城公園すいじょうを過ぎる辺りから行田市街となり、かつて足袋の製造地で有名だった証の蔵が散見されます。また、水城公園の西側を北上し、今は郷土博物館になっている、石田三成の水攻めで有名な忍城跡を見学しました。この行田宿で同心達は下りの宿を取っています。(中)

【新郷宿から富田宿へ】秩父鉄道の新郷駅(羽生市)から利根川に向かいます。利根川土手には川俣関所址の碑が建っています(写真1)。昭和橋を歩いて利根川を渡河しますが、私達以外は自動車ばかりです。川俣宿の景観は利根川土手から良く俯瞰できます。宿の中ほどに足尾鉾毒の川俣衝突事件の石碑があります。

館林市は分福茶釜もりんじで有名な茂林寺しんごうがあり、本堂に向かって大小の狸が並んでいます。渡良瀬川を渡るとすぐに雲龍寺があり、そこには田中正造と被害民の霊が眠っています。

佐野宿れいへいしは例幣使街道との合流地であり、同心達の



日光往還経路図



写真1 川俣関所址の碑

上りの2日目の宿泊地です。市街の厄除大師（惣宗寺）には田中正造の墓があり、遺骨はゆかりの地に分骨されています。大雲寺は唐沢山城主佐野昌綱の開基です。両毛線を北に越え、更に東方へ犬伏宿辺りを過ぎると大きな米山古墳につき当たります。

岩舟町に入り、慈覚大師円仁誕生の石柱を右に曲がると御堂と大師の像にたどり着きます。岩舟地蔵で有名な高勝寺は約六百段の石段の上にあり、岩舟山は同心達の道中の目印となっています。（鶏）

【栃木宿から今市宿へ】栃木宿（栃木市）は明治初期に県庁所在地であったこともあり落ちついた街並です。山本有三記念館に入館して、有三が当地で誕生し墓地もあることを知りました。巴波川の舟運によって栄えた塚田家の黒板塀と白壁の土蔵が川面に映る景色は見事です（写真2）。また、江戸初期より栃木宿の本陣名主を務めた岡田家が代々の遺品や建物を展示公開しています。



写真2 栃木宿内の土蔵

楡木宿（鹿沼市）で、小山からの壬生通りと合流します。壬生通りは江戸初期日光道中ができるまで東照宮参拝に利用され、以降も五街道の脇街道として道中奉行の管理下に置かれていました。例幣使街道は江戸中期から道中奉行の支配に置かれることとなった街道です。

同心達の上り宿泊地であった鹿沼宿は、江戸初期に城下町から壬生通り一の宿場町に変わりました。

文挟宿（日光市）を過ぎて板橋宿あたりから本格的な杉並木街道となり、日光道中との合流地点今市宿の追分地藏尊まで、車をよけながらの街道行脚となりました。なお日光杉並木は、この例幣使街道（壬生通り）と日光道中、会津西街道の三街道で見られます。（成）



写真3 旧道の杉並木と参加者

【日光山内へ】今市宿はずれの瀧尾神社からは、昔ながらの土の旧道に入ります（写真3）。東武日光駅周辺までは、杉並木が続き砲弾打込杉や並木太郎などと名づけられた大きな杉があります。また、特別保護地域と普通地域とに区分した標識が目につき、杉並木の景観が保護されていることに気づかれます。大谷川に架かる神橋に至り、八王子からの遠路を感じました。日光山内は、杉が鬱蒼と茂り、東照宮、大猷院の荘厳さと相まって厳かな雰囲気がかも醸し出されています。千人同心組頭の植田孟縉が著した『日光山志』の中で、「火之番屋敷」は「是は御山内火防ぎの御備えとして」と記述されています。見廻り拠点として構えられた火の番屋敷を、今は商店等になっている地に偲び、『日光山志』に記された社寺や番所の位置を思い描きながら火の番見廻りコースを歩きました。そして、大谷川に近い古刹の浄光寺には、日光勤番中に客死した同心達の墓の合葬経緯を刻した防火隊碑がひっそりと建っていました。坂が多く、気候も厳しい日光山防火任務の大変さに思いを巡らし、合掌しました。（内）

歩き終えた本年（平成26年）は、日光市と八王子市が姉妹都市提携して凶らずも40周年の年にあたりました。本年、新築なった日光消防署の1階には、建物外側から通りすがりの人が見ることのできる千人同心展示コーナーが設けられています。

日光には雨天にもかかわらず多数の外国人が訪れていました。この貴重な文化遺産を今日に伝えることになった日光勤番の千人同心たちの役割と苦労に思いを新たにしました。

（内田和隆・鷺沼稔・中村昌弘・成瀬正吉・福士堯夫）

〈写真紹介〉 市制施行 20 周年記念広告祭 ー大谷仁助商店ー

美甘 由紀子

大正 6 年 (1917)9 月 1 日、八王子町は市制を施行し、八王子市が誕生しました。市制施行から 20 周年の節目の年にあたる昭和 11 年 (1936)10 月 1 日から 4 日間、八王子市は市制施行 20 周年記念祝賀式を開催します。

記念行事の一環として、八王子商店研究会主催の記念祝賀広告祭が行われました。写真は、八日町一丁目(八日町交差点北西角地)にあった大谷仁助商店の「^{はちぶどうしゅ}蜂葡萄酒」(神谷伝兵衛が製造を始めた輸入の葡萄酒に蜂蜜や漢方薬を入れて日本人の口に合うように再製した葡萄酒)と「レッキス」(滋養飲料)の宣伝風景です。大谷仁助商店は、大正 5 年 (1916) 刊行の『八王子大商店写真画帖』に「洋酒食品欧米雑貨 花泉堂大谷仁商店」と紹介され、明治 30 年代の後半の広告には、^{はちじるしこうざんぶどうしゅ}「蜂印香罨葡萄酒」の特約店と出ています。店の前には、「レッキス」「蜂ブドー酒」と大きく商品名を染め抜いた旗を手にした従業員とおぼしき^{はんてん}半纏姿の男性がずらりと整列しています。半纏の^{えりじ}襟地には「蜂ブドー酒」とあり、頭には蜂の形の被り物を被っています。葡萄とワイングラス、大きな蜂の作り物を乗せた車が置かれ、まさに店を挙げての大宣伝会です。

甲州街道に面した店先には、「二十周年 祝市制」の丸提灯が吊るされ、日の丸に「市制記念」と書かれた広告塔が建っています。熱海から下の文字が隠れてしまっていますが、これは、商店連盟有志が主催した「記念祝賀熱海招待福引大売出し」の広告塔です。

当時、八王子商店連盟では、商店街の振興のためにショーウィンドーの装飾や広告に力を入れていました。昭和 10 年 (1935) には、店頭装飾競技会を開催し 65 店が参加しました。翌昭和 11 年の 2 月の商店振興研究会では東京の広告会社「^{しょうじきしゃ}正路喜社」の部長を招き広告宣伝に関する講演会を行っています。また、八王子商工会議所は、市制施行 20 周年記念祝賀式に合わせて「第二回八王子商店照明競技会」を開催しています。

しかし、翌昭和 12 年 7 月に日中戦争が勃発し、国民を戦時体制へ協力させることを目的に国民精神総動員運動が始まると、様相は変化していきます。商店研究会の定例会の内容も「^{しょういだん}焼夷弾と日本家屋」(9 月)、「国体的商店経営」(10 月)となりました。11 月には「警戒管制下に於ける商店照明審査会」が行われ、商店街にも徐々に戦時色が加わるようになったのです。



八王子の秤座出張所御用留^{ごようどめ} ～幕末の八王子を読み解く～

加藤 典子

前号では千人同心の幕末の海防意見書を紹介しました。この度は視点を変えて、幕末の八王子における庶民の生活をみていきます。

平成二十四年度、当館に八王子で文政三年(1820)から秤座出張所名代役をつとめていた杉本家の文書が寄贈されました。本文書には、八日町で杉本^{こつぎ}衡器製作所を開業し秤の製作・販売をおこなっていた明治以降の資料とともに、文政九年～慶応三年(1867)にわたる秤座出張所時代の御用留が大量に残されています。御用留とは代官所や旗本領主から下された命令・通達、宿村から出された訴状・陳情などを書き留めたものです。当時、秤は幕政のもとで秤座によって製作・販売が統制・独占されていました。したがって、杉本家の御用留の記述は、秤座として東国三十三か国を取り仕切った守随家の通達類^{しゆずい}がその大半を占めています。これらの通達は幕末の世相を多分に反映しており、幕末の人々の暮らしを私たちに示唆してくれます。それでは、その一部を見ていきましょう。

安政二年(1858)、江戸を大地震がおそいました。同年の御用留には「江戸大地震」と題してその詳細が記されており「十月二日夜四ツ時俄に地震起り家ゆりつぶれ即死けが人数不知、忽諸方より火事出来町之土蔵家並崩れし事筆紙難及(中略)右に付同四日暁七ツ時八王子出立、江戸御役所へ六ツ時頃江戸着御見舞申上候」と、甚大な被害であったことがわかります。また、地震から二日後には見舞として出張所名代役の杉本清兵衛が江戸の秤座役所を訪ね、守随家へ見舞金貳両を手渡しています。この時、役所は倒壊・焼失はなく無事でした。

しかしながら翌年六月に守随家手代よりある通達が届きます。「昨年大地震之節御役所并に御住居向等所々御破損に相成に付、当春より右御修復等にて甚物入相嵩候間、近頃乍御苦勞当辰年より来る酉年迄六ヶ年分御極印料金拾五両一時に先納之儀相達旨御沙汰候」とあり、地震によって物入のため極印料六年分を今月中に江戸まで持参するよう求めています。これに対して清兵衛は急遽六年分を用意することは難しいとしながらも、「当辰より末年迄四ヶ年分先納金拾両」と四年分の上納をおこなうことを認めています。

以上から、地震による直接的被害の少なかった八王子の人々にも、地震からの復興過程には様々な問題がその身に及んでいたことがわかります。

幕末には地震の頻発やコレラの発生など、天変地異や病気の流行が人々を襲いました。原因不明の出来事に対する恐怖心はもちろんのこと、経済的な負担は人々の生活を直撃し、社会への不満を増幅させました。幕府権威の失墜の背景には庶民の生活実感が少なからず影響していたのです。

さて、江戸時代には^{どりょうごう}度量衡統一のため公定の秤が設定され、守随家が江戸の秤座を世襲で請負しました。そのもとには四十一か所の出張所が設けられ、守随家の極印が入った秤のみが代行販売されました。各出張所はその秤を販売するため、毎年極印料として上納金を支払わねばなりませんでした。また、各地の出張所には「秤改」という大きな^{はかりあらため}仕事があり、周辺宿村で使用されている秤に不正や破損がないかを確認して廻村しました。杉本家に残る秤改の記録帳からは八王子十五宿・日野宿・周辺助郷村などを担当していたことがわかります。御用留にも秤改に関する事項が記されています。秤改の際には守随家の権威のもと苗字帯刀が許され、不正な秤の使用は厳罰の対象でした。江戸時代には貨幣として金銀の公平な計量が必要であったため秤の統一は極めて重要な問題だったので。特に幕末には貨幣経済が浸透し、その必要性はますます高まってきました。

今年度の特別展「幕末の八王子」では幕末の庶民生活についてもご紹介する予定です。



【参考】林英夫ほか編『守随家秤座文書』(新書社、昭和42年)
※文書中の旧字は新字に、片仮名は平仮名に統一した

廣園寺の梵鐘銘について

八王子の鋳物師・加藤氏については、よく知られています。とくにその作例は数多く、寛永三年鋳造の大善寺の梵鐘をはじめ、いくつか現存しています。

そのなかから、今回は、山田町の廣園寺に所蔵されている梵鐘とその銘文を紹介します。兜率山廣園寺は、康応二年（1390）に峻翁令山和尚により開山された寺院で、大江備中守師親が開基とされる名刹です。残念ながら、開山当時の境内図などはありませんが、江戸時代初めの絵図からは、40以上の塔中をもつ有力寺院だったと想像できます。

今回紹介する梵鐘は、慶安二（1649）年に加藤甚右金吾吉重によって鋳造されたもので、現在、仏殿内に保管されています（非公開）。

江戸時代の官撰地誌『新編武蔵国風土記稿』（以下『風土記稿』とします）には、「鐘楼ニヶ所」として、「一は開山堂の前にあり、寛永十九年鋳替の鐘也」と詳細に銘文を紹介し、「一

は、方丈の前にあり、慶安二年の鋳造なり」としています。つまり『風土記稿』では、寛永十九年（1642）の鐘の銘文と今回紹介する慶安二年鋳造の銘文とを合わせて記述しているのです。

廣園寺の梵鐘の大きさは、高さ約148cm、直径約82cmで、江戸時代の鋳物師名のほかに、以下の文がみえます。それは、大江朝臣沙彌心廣が寺院を創建し、開山和尚が応永四年（1397）、大和権守守光に梵鐘を作らせた。やがて、応仁二年（1468）に大檀那大江朝臣廣房が相州住式部丞に再鋳させ、3年後（文明三年）には、祐心という導師が供養したという内容です。ここには、お寺の開山などに関わる人物だけでなく、中世の梵鐘を製作した鋳物師も登場します。

つぎに中世の鋳物師名の「大和権守守光」と「相州住式部丞」をみてみます。2名の鋳物師のなかでも、「相州住式部丞」については相模国にいたことしかわかりませんが、「大和権守守光」銘の梵鐘は、横浜市内（妙光寺）にも作例があるようです（正中二年：1325鋳造）。

実は、この「大和権守守光」は、物部姓を名乗った一族で、物部姓鋳物師は、神奈川県厚木市飯山を拠点に活動していました（当時は、毛利庄とよばれていました）。

物部姓鋳物師の活動は、寛元三年（1245）の梵鐘銘「大工物部重光」から約100年間で8人が知られ、鎌倉の大仏鋳造にも関わった関東随一の鋳物師だったともいわれます。

昭和41年、慶安二年銘の梵鐘をそのまま模して新しい鐘が鋳造されました。この梵鐘の銘文も鐘の音とともに地域の歴史を伝えていくものとなるでしょう。



仏殿内に保管されている梵鐘（非公開）



梵鐘の銘文